

よりよい生活づくりへの意欲を高める学級活動

—活動の価値を子どもたちの実感につなげる手立てを通して—

特別活動研究会議

伊之口 有¹

石田 健夫²

横山 里恵³

小田 節子⁴

要 約

よりよい生活や人間関係を築く力の育成が現代社会において求められている。そうした中、学級生活に起因する課題に対し、話し合いと実践によってその解決をめざすことを特質とした学級活動（1）の教育的意義が高まっている。そのような背景を踏まえ、本研究会議では、学級における集団生活の充実と向上に主体的に関わろうとする意欲（＝よりよい生活づくりへの意欲）を高めることが重要であると考えた。

よりよい生活づくりへの意欲を高めるためには、子どもたちが他者とともに話し合い、協力して取り組むことの価値を実感することが重要である。そこで、授業においては、話し合いと実践を一連の活動ととらえ、活動と振り返りを通して学級のよりよい変化を実感できるような手立てを重視した。具体的には、①議題の提案理由の明確化と話し合いのめあての設定、②話し合いの終末における価値付け、③活動のつながりや成果を意識付けるワークシートの工夫、の三つを講じた。

これらの手立てを重視して授業を行った結果、目的意識をもって話し合いに臨む姿や、集団としてどのような成長を遂げたかという視点で実践を振り返る姿が見られるようになった。また、このような取組を積み重ねることで、子どもたちの学級活動に対する意識が変容するとともに、学級生活への主体的な参画につながる事が分かった。

キーワード よりよい生活づくり 話し合いと実践 振り返り 実感

目 次

I 主題設定の理由	58	6 検証授業の実際	64
1 はじめに	58	(1) 小学校3年 第1回	64
2 子どもたちの実態から	58	(2) 小学校3年 第2回	67
3 課題解決の鍵は学級活動（1）に	59	(3) 中学校1年 第1回	68
4 学級活動を「生活づくり」ととらえる	59	(4) 中学校1年 第2回	71
II 研究の内容	60	7 検証授業を実施した学級の変容	73
1 研究の目的	60	III 研究のまとめ	75
2 研究の手順と研究対象	60	1 研究を通して見えてきたこと	75
3 研究主題に関わる言葉について	60	2 今後の課題	76
4 意識調査から研究の方向性を探る	61	参考文献	76
5 研究の構想	62	指導助言者	76

¹川崎市立東高津中学校教諭（長期研究員）

²川崎市立菅小学校教諭（研究員）

³川崎市立京町小学校教諭（研究員）

⁴川崎市立長沢中学校教諭（研究員）

I 主題設定の理由

1 はじめに

人は誰でも幸せでありたい、よりよくありたいという思いや願いをもって生きている。それは、社会構造がどれだけ変化しようとも、変わる事のない人間の根源的な欲求である。その欲求は当然、子どもたちの心にも存在する。だからこそ、新年度を迎えると「こんなクラスにしたい」「こんなことを頑張りたい」という希望に満ちた雰囲気の中で学校生活をスタートさせることができるのである。

その一方で、「前のクラスの方がよかった」「このクラスには馴染めない」と、他者と何の関わりももたないうちから集団生活への否定的な感情を吐露する子どもがいることも事実である。集団に適應することができれば、やがては薄らいでいく一時的な感情ととらえることもできる。しかし、これから先の人生において、自身が所属する集団や環境の変化は何度となく訪れるはずである。だからこそ、集団の一員としての自覚をもち、多様な他者と協力しながら、よりよい学級や学校の生活を主体的につくりだそうとする力をもった子どもを育てたいと強く思うのである。

2 子どもたちの実態から

表1は、平成25年に内閣府が発行した「小学生・中学生の意識に関する調査報告書¹」の内容の一部を取り出したものである。これによると、学校での生活が「楽しい」または「まあ楽しい」と答える子どもの割合が96.8%、「友達との関係がうまくいっている」との質問に「あてはまる」または「まああてはまる」と答える子どもの割合が97.5%であった。

これらの調査結果から、多くの子どもたちにとって、学校生活は楽しく充実したものであり、人間関係にもおおむね満足していることが分かる。

一方、同調査によると、「気の合わない人とも、話をすることができる」と答える子どもの割合は半数以下に留まっているほか、「友達とのつきあいが、めんどくさいと感じることがある」と答える子どもがおよそ5人に1人の割合で存在する。これらの調査結果は、「多様な」他者との関わりについて、必ずしも積極的でないことを示している。人間関係をうまく築くことができない子どもにとって、教師がきっかけをつくることは大切であるが、最終的に子どもたち自身が多様な他者と関わる必要性に気付くようにしていかなければならないと考える。

表1 内閣府『平成25年度小学生・中学生の意識に関する調査報告書』

【学校生活について】	
あなたは今の学校での生活が楽しいですか	
楽しい	80.6%
まあ楽しい	16.2%
あまり楽しくない	2.8%
楽しくない	0.5%
友達との関係がうまくいっている	
あてはまる	81.3%
まああてはまる	16.2%
あまりあてはまらない	2.2%
あてはまらない	0.3%
【友達付き合いについて】 (複数回答可)	
何でも話せる友達がいる	90.2%
気の合わない人とも、話をすることができる	46.4%
二人きりで仲良く話をしたり遊んだりする異性の友達がいる	31.7%
友達とのつきあいが、めんどくさいと感じることがある	19.7%
あてはまるものはない	0.7%

¹内閣府『平成25年度 小学生・中学生の意識に関する調査 報告書』2014年

全国の満9歳から満14歳までの小学生・中学生2,000人に対し、家庭生活、学校生活、友人関係、逸脱行動、自分の性格、価値観等に関する意識を調査したものである。

3 課題解決の鍵は学級活動（1）に

学校生活では、他者と知り合いになることや仲よくなることだけではなく、多様な価値観や性格などをもつ人々が集まって、ともに生活することの意義や困難さを経験することが大切である。その点で、集団活動の特質とする特別活動の果たすべき役割は大きいといえる。とりわけ「学級活動（1）学級や学校の生活づくり【以下、学級活動（1）と表記】」が、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度の育成に寄与するところは大きい。なぜならば、学級活動（1）では、一般に学級会と呼ばれる話し合いを通して集団の合意形成を図り、話し合いで決まったことの実践によって学級生活に起因する現実的な課題を解決するという過程を重視しているからである。

生活づくりの過程において、「自分とは異なる思いをもつ友達の存在に気付くことができた。」「話し合いでは対立しても、それを乗り越え目標に向かってみんなで活動することができた。」という経験をするのが、異なる価値観がぶつかっても壊れることのない確かな人間関係を築く力の源になるのではないだろうか。また、そうした経験を学級という小さな社会集団の中で積み重ねることができれば、学級から学校、ひいては地域・社会へというように、所属する集団が変化しても、集団の一員として多様な他者と協力しながらよりよい生活をつくろうとする姿勢を貫くことができるのではないだろうか。こうした思いから、学校生活の基盤となる学級を母体とした「生活づくり」を通して、子どもたちの課題解決を図りたいと考えた。

4 学級活動を「生活づくり」ととらえる

平成20年1月の中教審答申では、今日的な課題を踏まえ、「社会に参画する態度や自治的能力の育成を重視する」という特別活動改善の基本方針が示された。この考えを基盤として現在の学習指導要領からは「生活づくり」という言葉が用いられるようになった。

特別活動を「生活づくり」ととらえることについて安井²は、「日常的な生活活動を子どもたち自身の手によって主体的に組織化する過程において、学校を楽しく、生きる喜びに満ちた、魅力ある生活の根拠地とすることを意味する。」と述べている。つまり、「生活づくり」という言葉には、子どもたち一人一人がこれまで以上に主体的に学級生活の充実と向上に関わることや、自分を含む自分たちの力で生活を豊かにしていけることへの期待が込められているのである。その点を考慮すると、子どもたち自身が自分のこととして学級の集団生活について考え、その充実と向上のために協力し合って課題解決しようとする意欲を高めることが重要だと考える。

生活づくりへの意欲を高めるという視点で自分自身の取組を振り返ってみると、「自分たちの意思決定によって学級や学校をよりよいものに変えることができた。」という経験の機会を充実させることや、「集団生活における課題解決や目標達成のためにはみんなで話し合い、協力して実践することが大切だ。」という活動の価値を子どもたちに実感させることへの意識は十分とは言えなかった。本研究を通して、「生活づくりの主体は子どもたちである」という指導観を再認識し、教師としての指導・援助の在り方を探りたいと考えた。以上の理由から、次のように研究主題を設定した。

研究主題

よりよい生活づくりへの意欲を高める学級活動

— 活動の価値を子どもたちの実感につなげる手立てを通して —

² 安井 一郎 『特別活動と人間形成』2010年 学文社 p.132

II 研究の内容

1 研究の目的

本研究は学級活動（1）において、子どもたちが集団の一員としての自覚をもち、集団生活の充実と向上に主体的に関わろうとする意欲を高めることをめざし、そのための教師の指導や援助の在り方を探ることである。

2 研究の手順と研究対象

研究手順は図1の通りである。実態把握のための意識調査および授業実践は、川崎市内のA小学校第3学年1クラス（34人）、B小学校第3学年1クラス（42人）、C中学校第1学年1クラス（37人）を対象とした。

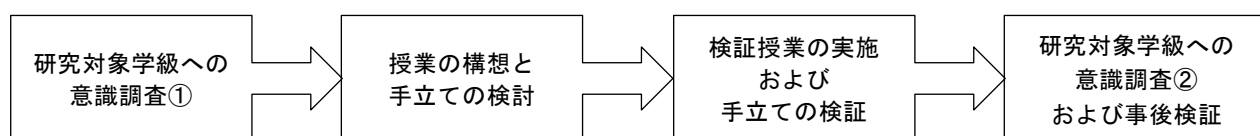


図1 研究の手順

3 研究主題に関わる言葉について

（1）本研究における「よりよい生活づくり」とは

本研究における「よりよい生活づくり」とは、学級における集団生活上の課題に対し、「私もよく、みんなもよい」解決を図ろうとすることである。ここでいう課題とは、解決すべき事柄だけではなく、学級生活をより楽しく豊かにするための工夫や創造も含まれる。

よりよい生活づくりへの意欲がある子どもとは、集団生活の充実と向上をめざして行われる一連の活動、すなわち話し合い（学級会）と話し合いで決まったことの実践にも主体的に関わろうとする子どもである。何をもち「よりよい生活」とするかは、生活づくりの主体である子どもたちの価値判断を伴うが、それとともに教師自身も、学級の実態や活動状況を的確に判断し、子どもたちにとって「よりよい生活」とは何かを考え、その実現に向けた指導の方向性を見通すことが必要となる。

（2）「活動の価値を子どもたちの実感につなげる」とは

小学校学習指導要領解説 特別活動編 第3章（6）アには次のように示されている（文中の太線、破線は筆者による加筆）。

（6）その他の配慮事項

ア 学級活動（1）では、学級の生活上の共同の問題を取り上げ、学級会を通して学級としての意見をまとめるなど集団決定をし、決まったことを協力して実践していく活動が中心となる。その際、折り合いを付けることや集団決定したことをみんなで実践することの大切さが実感できるようにするとともに、充実した楽しい学級や学校の生活が送れるようにすることが重要である。

文中の太線部は、活動の具体を示すものであり、文中の破線部は活動の価値を示しているといえる。形式的な活動の展開によって「活動あって学びなし」という事態を避けるため、本研究では、子どもの発言や行動を適切に価値付けたり、活動を振り返ったりすることを通して、他者とともに協力して取り組むことの価値を子どもたち自身に気付かせることを重視する。そのような視点で指導・援助を行うことを、本研究では「活動の価値を子どもたちの実感につなげる」とする。

4 意識調査から研究の方向性を探る

(1) 意識調査について

① 意識調査の内容

研究対象学級の子どもたちが、学級活動のどのようなところに手ごたえややりがい、あるいは難しさを感じているのかを把握するために質問紙による調査を行った。生活づくりの過程が広範囲にわたることから、活動の中核となる話合いについて聞くこととした。質問文には、各教科等の話合いと区別するために「学級会」という言葉を用いた。具体的には「あなたは学級会が好きですか」という質問に対し、その程度を「好き」「どちらかといえば好き」「どちらかといえば好きではない」「好きではない」の4件法で回答させ、その理由を自由記述させた。

② 自由記述の内容とその分類

自由記述の内容を、その質的な特徴において分類し、整理した(表2)。

【「自分の意見を伝えること」に関する記述】

自分の意見を伝えられる場として学級会をとらえた記述である。肯定的な記述が多いが、議題に対する考えをもてないことや、学級の雰囲気根拠とした否定的な記述もあった。

【「他者の意見を聞くこと」に関する記述】

他者の意見を聞く場として学級会をとらえた記述である。日頃の人間関係の中だけでは聞くことのできない他者の意見を聞けることに価値を見いだしている。一方、本音で語り合えないことへの不満から、否定的な記述も見られた。

【「集団決定をすること」に関する記述】

自分たちで何かを決められる場として学級会をとらえた記述である。みんなで楽しいことを決められるという点に価値を見いだした記述が多かった。一方、自分の提案が否決された経験から、学級会を否定的にとらえる記述もあった。

【「話合いで決まったことの実践」に関する記述】

集団決定に関する記述と関連した記述である。小学校では、「話し合っ

て決めたことを実現すると楽しい」という記述が多かった。学級会の先に話合いで決まったことの実践があるということを経験的に理解している児童の記述と考えられる。一方、中学生でこのような記述は見られなかった。

【学級の変化や成長に関する記述】

話合いや話合いで決まったことの実践が学級に前向きな変化や成長を生むことをとらえた記述である。問題が解決すること、学級に規範意識が生まれることを根拠にした記述があった。

【その他の記述】

中学校では、学級会を「どちらかといえば好き」と肯定的にとらえている生徒の中に、「時間が過ぎるのが早いから」、「勉強しなくてよいから」と記述した生徒がいた。

表2 子どもの自由記述例
○…肯定的な記述 ●…否定的な記述

「自分の意見を伝えること」に関する記述の例
○いろいろな意見が言えてうれしい。(小) ○自分の本当の意見をみんなの前で言えるから。(中) ○自分の意見を出せてその考えが役立つとうれしい。(中) ●意見をいうのがはずかしい。(小) ●意見が思い浮かばない。(中) ●反対意見の人が言葉をさえぎるといやになる。(中)
「他者の意見を聞くこと」に関する記述の例
○みんながどうしているか分かるから。(小) ○いつもは聞けない意見を聞くことができるから。(中) ●正直にいやだって言う人が少ない。(小) ●意見を言う勇気のない人がいるから。(中)
「集団決定をすること」に関する記述の例
○話しあって子どもだけで決められるから。(小) ○互いに意見を言い合って、みんなが納得できるようにものごとを決めることができるから。(中) ●自分が提案したものに決まらなと悔しい。(中) ●言い合いみたいな雰囲気になると、きらいになる。(中)
「話合いで決まったことの実践」に関する記述の例
○みんなで決めたことをやるとすごく楽しめるから。(小) ○学級会でいろんな集会とかパーティーでやることなどができるから。(小)
「学級の変化や成長」に関する記述の例
○学級目標に近づけるいろいろなことができる。(小) ○みんなの意見が聞けていろいろなことが分かった、注意しあおうという雰囲気になるから。(中)
その他の記述の例
○みんなのはくしゅがいいし、反応がいい。(小) ○きょうりょくとかゆずりあったりするから好き。(小) ○時間が過ぎるのが早いから。(中) ○勉強しなくていいから。(中)

(2) 意識調査から見えた課題

本研究の対象となる子どもたちの学級活動に対する意識調査を実施した結果、これまでの経験を踏まえた学級会に対する考え方を知ることができた。それと同時に次のような課題が見えてきた。

- ・話し合っただけで決まったことが実践に結びつくという感覚が乏しい子どもについては、話し合いに対して形だけの参加にとどまるおそれがあることから、話し合いと実践を一連の活動として確実に実施する。
- ・実践（特に集会活動）の振り返りが、「楽しかった。」という感想だけで終わることのないよう、話し合いと実践が学級にどのような変化や成長をもたらしたのかを十分に振り返られるようにする。
- ・学級会が好きな理由として「勉強しなくていい」「時間が早く過ぎる」と記入した生徒がいたことから、話し合いに目的意識をもって臨めるようにするとともに、みんなでやり遂げたという達成感・成就感をもてるようにする。

5 研究の構想

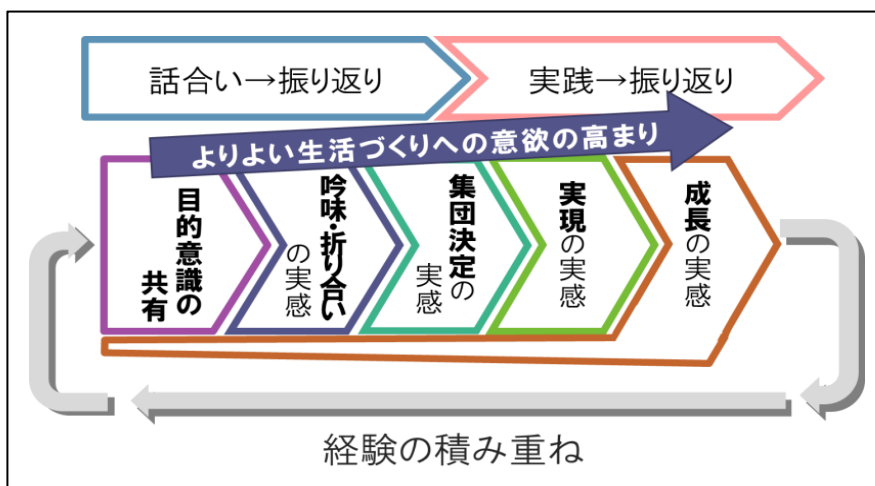
(1) どのようにしてよりよい生活づくりへの意欲を高めるか

本研究会議では、意識調査の結果と課題を踏まえ、生活づくりの過程で最終的に子どもたちがめざした目標やめあてに近づくことができたという実感をもつために必要な場面を検討し、「活動の価値を実感する場面」として設定した(表3)。

学級活動(1)において教師が表3の場面を保障すること、話し合いと実践を振り返ること、この経験を継続的に積み重ねていくことで、子どもたちのよりよい生活づくりへの意欲が高まり、集団生活への主体的な参画が期待できると考えた(図2)。

表3 活動の価値を実感する場面

① 目的意識の共有	わたしやみんなの思いを伝え合い、目的意識を共有していると感じる場面
② 吟味・折り合いの実感	よりよい考えはないか、みんなで知恵を出し合えた実感できる場面
③ 集団決定の実感	わたしもよくみんなもよい集団決定ができた実感できる場面
④ 実現の実感	みんなで決めたことを協力して実現できた実感できる場面
⑤ 成長の実感	みんなでめざした目標やめあてに近づくことができた実感できる場面



手立て1 提案理由の明確化と話し合いのめあての設定

議題の提案理由は、「何のために話し合うのか」という目的意識を共有するために、話し合いのめあては「何をめざして話し合うのか」を示すために、とても重要なものである。仮に「学級目標を実現させたいから」という提案理由であったとしても、学級がどのようなことが目標を実現したことになるのかが明確でないうちは、話し合う拠り所としては十分とは言えず、吟味・折り合いの実感をもつことができないおそれがある。考えの出し合いに終始するという意味での活発さや、論点のずれが生じないようにするためにも、事前の計画委員会（プログラム委員会）の活動で提案理由の明確化を図るとともに、話し合いのめあてを設定する。ここでいう話し合いのめあてとは、「相手に伝わる声の大ききで話そう」などの話し合いの技能に関わるめあてではなく、「学級として何をめざすのか」が分かるめあてとする。

手立て2 話し合いの終末における価値付け

話し合いの終末における教師の話は、子どもたちに話し合いを振り返る視点をもたせる絶好の機会である。教師はともすると話し合いそのものの活発さや発言の回数に着目しがちだが、本研究では、前回までの話し合いと比べて成長した点や、今後の課題を子どもの発言をとりあげて具体的に価値付けることを意識した。この手立てによって期待できることとして次の二つが挙げられる。

一つ目は「『～』という発言が大切です。」と教師が一方的にかつ前もって教えるよりも、「〇〇さんの『～』という発言が集団決定につながりましたね。」と具体的な事実に基づいて価値付ける方が、子どもはその場面を思い起こし、「確かにそうだった。」という実感を伴いながら発言のもつ意味を理解できるということである。二つ目は、集団決定や相互評価の場面でとりあげられることのなかった望ましい行動や発言へのフォローができるということである。学級会の中では「今日のキラリさん」、「今日のMVP」といった名称で子どもたちによる相互評価が行われることがある。学級会そのものに慣れないうちは、相互評価の場面において、発言回数の多い子どもや司会グループを称賛する内容の発言が多くを占める。相互評価の後に教師の話が入ることで、相互評価では注目されなかった行動や発言の中にも大切なものがあったのだと気付かせることができる。また、少数意見や否決意見を述べた子どもにとっても、活動の努力を認められることによって、自分の判断に自信をもち、より意欲的に話し合おうとする。本研究では特に、「集団決定につながる発言」を意欲の表れととらえ、研究会議で具体的な発言の例を整理し、教師が子どもたちの発言を価値付ける際の一助とした（表4）。

表4 子どもたちの発言を価値付けする際の資料（特別活動研究会議作成）

発言の種類	発言の例
分かってもらう発言	「それは…ということですか？」（質問や確認）
相手を意識した発言	「…の方がよいと思うのですが、みなさんはどうですか？」
話し合いの進行を考えた発言	「あと2つ決めたいけれど、時間は足りるのかな？」
めあてや提案理由を意識した発言	「こちらの方がめあてに近い意見なのでよいと思います。」
経験に基づいた発言	「前に…をしたとき…だったから…してはどうですか？」
集団決定に向かおうとする発言	「2つの意見の…と…を合わせるのはどうですか？」 （折衷案、寄せ集め、つけたし など）

手立て3 活動のつながりや成果を意識付けるワークシートの工夫

学級活動におけるワークシートは、話し合いについて自分の考えを整理したり、話し合いや実践を振り返ったりすることを目的として用いられる。本研究ではワークシートの内容に次の二つの工夫をした。一つ目は、話し合いと実践のつながりを意識付けるための工夫である。具体的には、「話し合いで決まっ

たことに対して「がんばりたいこと」の記入欄を設けた。このような記入欄を設けることで、実践へ向けた期待感をもつことや、実践の中でめあてを意識して行動する自分をイメージすることにつながる考えた。二つ目は、話し合いで決まったことの実践を通して、どのような成果や成長があったのかを意識付けるための工夫である。具体的には「やってよかったこと」と「その理由」の記入欄を設けた。また、今後の実践に向けた改善点を意識できるように「もうひといきだったところ」と「次はこうしたい」の記入欄、あるいは、個の成長と集団の成長を区別して振り返りができるように、活動を通して「自分が成長したと思うこと」と「学級が成長したと思うこと」の記入欄を設けた。

意識調査から見えた課題でも述べたように、話し合いで決まったことが実践に結びつくという感覚の乏しい子どもや、話し合いで決まったことの実践が「楽しかった。」だけで終わってしまいがちな子どもにとって特に有効な手立てとなることを期待した。

6 検証授業の実践

(1) 小学校3年 第1回(市内A小学校:6月実施)

① 授業の概要

<p>【議題】「やさしさいっぱいミニ運動会をしよう」</p> <p>【学級の実態】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「あいさつ」「やさしさ」「元気」をキーワードとした学級目標を掲げている。 ・素直な児童が多く、教師の期待に応えようとする姿勢が見られる。 ・これまでに実施した2回の学級会の様子から、自分の意見に固執する児童がいること、他者の意見に寄り添おうとする児童が少ないことが学級の課題だと感じている。 <p>【議題選定の経緯と活動のねらい】</p> <p>議題の提案者は本学級の児童3名である。5月に実施したなわとび大会(集会活動)で、「なわとびを苦手と思っている人がいる」と感じた児童が、運動が苦手な人の気持ちを考えた集会を実施してはどうかと提案した。本実践を通して、自分の思いだけでなく他者の思いに寄り添った考え方ができるようになることを活動のねらいとした。</p> <p>【学習指導要領との関連】</p> <p>学級活動(1) 学級や学校の生活づくり ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決</p>

【活動の流れと検証の視点】

	事前の活動(◆は計画委員会の活動)	話し合いと振り返り	実践と振り返り
児童のおもな活動	<ul style="list-style-type: none"> ◆司会グループの役割を確認する。 ◆議題と提案理由を確認する。 ◆提案理由を明確にし、話し合いのめあてを決める。 手立て1 ◆個々の意見を知るためのアンケートを作成する。 ・次回の学級会について、議題やめあてを知る。 ・アンケート「ミニ運動会でやりたい種目とその工夫」を記入する。 ◆アンケートの考えをまとめ、おおよその内容を把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・やさしさいっぱいミニ運動会の「種目」と「工夫」について話し合い決定する。 <ol style="list-style-type: none"> 1. はじめの言葉 2. 司会グループの紹介 3. 議題の確認 4. 提案理由の説明 5. 話し合いのめあての確認 6. 決まっていることの確認 7. 話し合い 8. 決定事項の確認 9. 先生の話 手立て2 10. おわりの言葉 <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの振り返りをする。 手立て3 	<ul style="list-style-type: none"> ・計画委員会を中心に役割を確認する。 ・集会に向けた準備を行う。 ・実践する。 ・活動の振り返りをする。 手立て3
検証の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・手立て1によって、目的意識をもち、集団決定に向けて意欲的に話し合いに臨むことができたか。 →児童の姿・発言から見取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手立て2によって、話し合いの充実感や達成感を味わうことができたか。 →児童の姿・表情、ワークシートの記述から見取る。 ・手立て3によって、話し合いで決定したことと実践のつながりを意識できたか。 →ワークシートの記述から見取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手立て3によって、児童が具体的な事実をもとに、活動の成果を感じることはできたか。 →ワークシートの記述から見取る。

② 内容分析と手立ての検証

手立て1 提案理由の明確化と話し合いのめあての設定

事前の活動（計画委員会）では、話し合いを通してめざす「やさしさ」の姿を具体的な言葉に置き換えるために、教師が提案者の児童の思いを引き出すような援助をした。具体的には「どうなることがやさしさにつながると思われますか。」や「この集会をすることでクラスはどう変わると思われますか。」などの投げ掛けによって、提案理由の明確化を促した。話し合いのめあては、自分の意見に固執する児童が多いという学級の実態を踏まえ、他者の思いに寄り添うことを意識しためあてを設定した。授業記録アは学級会の冒頭で、提案理由と話し合いのめあてを述べている部分である。

授業記録ア C：児童	提案理由の説明	めあての確認
<p>C1：これからミニ運動会について提案します。提案した理由は、学級目標の「やさしさ」に近づきたいからです。なぜ近づきたいかという（5月のなわとび集会の写真を指さしながら）、前やったなわとび大会でなわとびを苦手と思っている人がいることがわかりました。</p> <p>C2：なので、ミニ運動会をやることで（運動を）苦手と思っている人の気持ちを考えることがやさしさにつながると思ったからです。学級目標にもある「やさしさいっぱい」のクラスにしていきたいです。</p> <p>C1、C2：これで、提案理由を終わります。</p> <p>司会者：話し合いのめあては「みんなの気持ちを考えよう」です。それがやさしさにつながります。では、話し合いに入ります。</p>		

授業記録アを受けて、学級会は「やさしさいっぱいミニ運動会で実施する種目の工夫」の話し合いへと進んだ。児童は意見を出すことにたいへん意欲的で、リレーの工夫についても多くの意見が出ていた。途中までは「スキップでリレーをする」という提案に多くの賛成意見が集まっており、そのまま決定に至ってもよい状況であった。授業記録イはそのときの話し合いの場面である。

授業記録イ C：児童
<p style="text-align: center;">スキップでリレーをするという工夫に賛成する意見が多数出ている状態</p> <p>C3：ぼくは、スキップに賛成です。理由は、スキップにすれば、足が速い人も遅い人もそんなに関係ないからです。</p> <p>司会者：C4さん。</p> <p>C4：えっと、私はスキップに反対です。理由はスキップができないからです。 （教師が司会者の児童に助言をする）</p> <p>司会者：スキップに決めたいのですが、苦手という意見があるので、それを解消できる意見はありますか。</p> <p>— 中略 —</p> <p>司会者：C5さん。</p> <p>C5：解決方法で、スキップができない人は得意な人に教えてもらって中休みに練習すればいいと思います。</p> <p>司会者：C4さんどうですか？C4さんに（スキップを）教えてくれる人はいますか？ （多数の児童が挙手する）</p> <p>司会者：では、みなさん、お願いします。</p>

授業記録イのような話し合いが展開された理由の一つとして、教師が司会者に「スキップができない。」という児童の問題を解消する意見を促すよう助言をしたことも挙げられる。しかし、その後に「できない人はそれをやらない」方法ではなく、「できる人に教わって一緒にできるようにする」方法を支持し、それに協力しようとする意志を多数の児童が挙手で表している。これは、提案理由の明確化と話し合いのめあての設定によって、学級がめざす「やさしさ」の具体が児童の間で十分に共有されていたことによるものと考えられる。結果として安易な多数決ではなく、少数の意見にも寄り添い、折り合いをつけて集団決定に至ることができた。振り返りのワークシートの中で「私もみんなもなっとくしていたか」という評価項目に34人中21人が3段階評価（◎、○、△）で◎をつけていたことから、集団決定の実感を得られたと判断できる。

手立て2 話し合いの終末における価値付け

授業記録ウは、C4が素直に自分の思いを述べたことが学級目標に近づくきっかけになったということ価値付けた場面である。また、C4の気持ちに寄り添った解決策を見だし、C4の困り感や不安感を支えようとした児童についても、めあてが達成できていることを教師が価値付けている。

児童の表情から、自分の発言が集団決定やめあての達成に貢献できたことへの喜びや満足感を見取ることができた。このことから、手立て2は、話し合いの充実感をもたせる上で有効だと考えられる。

授業記録ウ	T：教師	C：児童
T：C4さん。「スキップできない」って言うのって、けっこう勇気いりますよ。でも、あなたが言ったから学級目標の「やさしさ」に近づけたんですよ。 (C4 大きくなぞく)		
T：だからあそこで「スキップを教えてあげる」って手を挙げた人、それだけでもうめあてを達成していますよ。「みんなの気持ちも考える」。ぜひね、忘れたって言わずにちゃんと中休み、しっかりスキップできるまで教えてあげてください。先生もお手伝いにいきますね。		

手立て3 活動のつながりや成果を意識付けるワークシートの工夫

ア 話し合いのワークシートから

表5は、話し合いで決まったことに対してがんばりたいことについての記述の抜粋である。どの記述も共通して「やさしさ」を意識したものであることが分かった。また、C8は学級会の中では一度も発言をしなかった児童であるが、記述の内容から、他者の意見をしっかりと聞くという形で話し合いに臨んでいたことが分かった。このことから、話し合いと実践のつながりを意識づけるための手立てとしてワークシートの工夫は有効だといえる。

表5 話し合いで決まったことに対してがんばりたいことの記述（児童のワークシートより抜粋）

C6	やさしくかつどうして、みんなでなかよく集会をやる。
C7	やさしさいっぱいミニ運動会なので友だちにゆずったりやさしくしたりしたいです。
C8	負けないようにがんばって、負けてもやさしく「よかったね!」と言う。

イ 実践（集会活動）振り返りのワークシートから

表6は、集会活動をやってよかったこととその理由についての記述の抜粋である。集会活動の中でそれぞれが感じた「やさしさ」の姿が児童の言葉で表現されており、学級目標の「やさしさ」に近づくことができたという成長の実感をもっていることが分かる。このことから、児童が実践の中でどのような変化や成長があったかを振り返り、成長の実感につなげるための手立てとして、振り返る視点を焦点化したワークシートの工夫は有効だといえる。

表6 集会活動でやってよかったこととそう思う理由の記述（児童のワークシートより抜粋）

	やってよかったこと	そう思う理由
C9	やさしさがたっせいできたこと。	みんなえがおでやっていたから。
C10	スキップが苦手な人のことを助け合って教えた。	もっと学級目標のやさしさに近づけられた。
C11	リレーのときに、みんながおうえんしていたところ。	おうえんをするとされたほうが、心がきもちいいし、やさしさにつながっていると思うから。

活動の改善点の振り返りについては、「並ぶのが遅かったので、次回は早く並んで学級会で決まったことをもっとやる。」「みんなのおしゃべりが気になったので、司会がしゃべろうとしている時はしっかり聞く。」などの記述があった。「次はこうしたらうまくいくだろう。」「ここは直した方がいい。」など、思うようにいかなかったことからの気付きが見られたが、振り返りの内容を児童同士で十分に共有する場の設定が課題として残った。

(2) 小学校3年 第2回(市内A小学校:11月実施)

① 授業の概要

【議題】『みんなで楽しもうドッジボール大会』のルールを決めよう

【議題選定の経緯と活動のねらい】

議題の提案者は本学級の児童2名である。休み時間に係の企画したドッジボール大会に参加をせず、教室でオルガン弾いていた複数の児童の発言が提案のきっかけとなった。参加しない理由を教師が尋ねたところ、「チーム分けが不公平」、「自分にはボールがまわって来ない」など不満の声が聞かれた。その思いを係の児童に伝えるように教師が促したところ、みんなで決めたいということで提案され、その後、全員に諮り決定された。

本実践では、運動が苦手な人の気持ちに寄り添うことをめあてとして実施された6月の集会活動(やさしさいっぱいミニ運動会)からの発展を意識し、係が外遊びの企画を立てる際にドッジボールの得意な者と苦手な者の双方の意見を取り入れるとよいことを理解させたいと考えた。

【学習指導要領との関連】

学級活動(1)学級や学校の生活づくり ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

【活動の流れと検証の視点】

検証授業1と同じ。

② 内容分析と手立ての検証

手立て1 提案理由の明確化と話し合いのめあての設定

— 計画委員会の場面 —

授業記録エは、提案者の児童が提案理由を伝える練習をしている場面である。ここでは6月の集会活動時のめあてと今回のめあての違いを意識させ、他の児童に提案理由が伝わりやすくなるように助言した。授業記録オでは、提案者の「学級をよりよくしたい」という思いを後押しするような投げ掛けによって、学級会へ向けた意欲を高めていた。

実際の学級会では、事前にとったアンケートの結果をもとにしながら「チームの分け方」、「外野のあり・なしについて」、「投げ方のルールについて」という3つの柱で話し合いが展開された。

学級会後に提案者(C1)の児童へインタビューを行ったところ、「話し合いが楽しかったというより、(ルールが)決まってよかったと思った。今日は提案してよかった。」という感想を聞くことができた。提案者にとって、自分が議題提案に至った思いを学級全体が共有し(目的意識の共有)、真剣に話し合いが行われることこそ喜びであり、実現への見通しを確かなものに行っているといえる。このことから、提案理由の明確化によって得られる効果は目的意識の共有に留まらず、提案という営みそのものの価値を提案者自身に実感させるものでもあると分かった。

手立て2 話し合いの終末における価値付け

この日の学級会における相互評価の場面では、発言内容の多くが司会グループを称賛するものであった。そこで、終末の教師の話の場面では、司会グループがしっかりと役割を果たしたことを認めつつも、「司会グループ以外にもこういう発言をした友達に気づきませんでしたか?」とドッジボールの得意な者と苦手な者の双方の意見を意識していた児童の発言をいくつかとりあげて価値付けをした。これにより、「私も実は気付いていたよ。」と、つぶやいたり挙手したりする児童の様子が見られた。

授業記録エ T:教師 C:児童

T:6月の集会のときなんだけど、6月のときの集会の名前、言えます?
C1:えっと…「やさしさいっぱいミニ運動会」。
T:うん、そうだね。「6月のやさしさいっぱいミニ運動会では、運動の苦手な人に合わせて決めましたが、今回は…」っていう感じで言うと、聞いている人たちは聞きやすいかもしれないね。

授業記録オ T:教師 C:児童

T:C2(提案者)さん。とっても思いが伝わってきました。C2さんの言葉、すごくよかったです。「ただみんなで楽しみたいです。」…とは違うよね。
(提案者 うなずく)
T:「みんなで楽しみたいだけじゃないんだよね?」
(提案者 再びうなずく)
T:これ(この話し合い)でクラスを変えたいっていう思いが伝わってきたので、それでいいと思います。

手立て3 活動のつながりや成果を意識付けるワークシートの工夫

— 実践の振り返りを共有する場面で —

集会当日の帰り学活では、ワークシートの記述をもとにして振り返りを共有する場面を設定した。活動の成果を振り返る場面では、「みんなで決めたルールでやったら、みんなが笑顔で楽しむことができたし、『みんなで楽しもうドッジボール大会』のめあてが達成できたと思う。」という発言があり、成長の実感をもつことができていると分かった。

改善点を共有する場面では、ワークシートの項目に合わせて「もっとこうした方がよいと思うことは何か。」と教師が投げ掛けた。「一回もボールを投げていない人がいたので今度はがんばって投げて欲しい。」「チーム分けをもっと平等にしたい。」など、いくつかの改善点が出され、「ぼくも同じ。」と同意を示すつぶやきをする児童もいた。中には授業記録カにおけるC3の発言のように、実際は整然と並ぶことが出来ているにも関わらず、「もっと並ぶのを早くしたい。」と活動への評価が厳しくなっている場面もあった。教師はこの発言に対し、以前に比べて整列の状況が改善されているという事実を確認する投げ掛けをするとともに、C3の意見も尊重し、「もっと（早く）できる？」と全体に投げ掛けることで、さらなる改善への意欲を喚起した。手立て3と併せて振り返りを共有する場の設定をしたことにより、外遊びを企画する係の児童に対して今後の活動をよりよくするための視点を与えることにつながった。

授業記録カ T：教師 C：児童

T：ここをもっとこうしたいっていうのがある人いたら立ってください。確認していきましょう。

… 中略 …

C3：並ぶのを早くしたい。

(Tが「ならばのを早く」と板書する)

T：でも、今日けっこう（並ぶの）早かったよね。

C：うん、うん。

T：でも、もっとできる？

C多数：うん、うん。

… 中略 …

T：(図3のように黒板を指さしながら) この4つの△は、「みんなでふれあい遊び係」さん、次、ドッジボールを企画するときちょっと考えてみてくださいね。ここを考えてもらおうと、もっとみんなが納得できると思います。

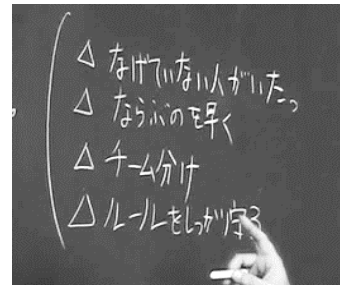


図3 改善点を板書する様子

(3) 中学校1年 第1回(市内C中学校：7月実施)

① 授業の概要

【議題】「団結し、協力し、楽しく合唱コンクールを迎えるための係を決めよう」

【学級の実態】

- ・「笑顔」「絆」をキーワードとした学級目標を掲げている。全員が笑顔になれるクラスを実現するために、互いに協力し合えるような個々の結びつきの強いクラスをめざしてつくられた目標である。
- ・明るく素直な生徒が多いが、自分自身の楽しさを優先してしまうところがあり、学級の一員として学級全体のことを考える力が未熟である。

【議題選定の経緯と活動のねらい】

議題の提案者は、学級委員と班長を中心メンバーとして組織されるプログラム委員会である。夏休みを目前に控えた生徒にとって、最大の関心事は9月に行われる合唱コンクールであった。「合唱コンクールについて話し合いたい」という漠然とした生徒の思いを議題化するにあたり、学級がめざす合唱コンクールに向けた取り組みの姿勢を明らかにする必要があった。生徒から「一部のリーダーだけが熱心に取り組むのではなく、全員の力を合わせて練習に臨みたい。」「楽しみながら取り組めるような合唱練習にしたい。」という声が挙がったことと、集団の一員としての自覚につながる活動にしたいという教師の意図を踏まえ、「独自の係をつくって活動してはどうか。」と教師が助言した。こうした過程を経てプログラム委員により議題が提案され、その後、全員に諮り決定された。

【学習指導要領との関連】

学級活動(1) 学級や学校の生活づくり イ 学級内の組織づくりや仕事の分担処理

【活動の流れと検証の視点】

	事前の活動 (◆はPTA委員会の活動)	話し合いと振り返り	実践と振り返り
生徒のおもな活動	<ul style="list-style-type: none"> ◆司会グループの役割を確認する。 ◆議題と提案理由を確認する。 ◆提案理由を明確にし、話し合いのめあてを決める。 手立て1 ◆個々の意見を知るためのアンケートを作成する。 <ul style="list-style-type: none"> ・次回の学級会について、議題やめあてを知る。 ・アンケート「合唱コンクールに向けてどのような係が必要か」を記入する。 ◆アンケートの考えをまとめ、おおよその内容を把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・合唱コンクールの「係」と「役割分担」について話し合い、決定する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ol style="list-style-type: none"> 1. はじめの言葉 2. 司会グループの紹介 3. 議題の確認 4. 提案理由の説明 5. 話し合いのめあての確認 6. 決まっていることの確認 7. 話し合い 8. 決まったことの確認 9. 先生の話 手立て2 10. おわりの言葉 </div> ・話し合いの振り返りをする。 手立て3 	<ul style="list-style-type: none"> ・係ごとに集まって活動内容を確認する。 ・必要に応じて係ごとに集まって準備を行う。 ・実践する。 ・活動の振り返りをする。 手立て3
検証の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・手立て1によって、目的意識をもち、集団決定に向けて意欲的に話し合いに臨むことができたか。 →生徒の姿・発言から見取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手立て2によって、話し合いの充実感や達成感を味わうことができたか。 →生徒の姿・表情、ワークシートの記述から見取る。 ・手立て3によって、話し合いで決定したことと実践のつながりを意識できたか。 →ワークシートの記述から見取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手立て3によって、生徒が具体的な事実をもとに、活動の成果を感じることはできたか。 →ワークシートの記述から見取る。

② 内容分析と手立ての検証

手立て1 提案理由の明確化と話し合いのめあての設定

授業記録キは話し合いの冒頭で、提案理由と話し合いのめあてを述べている部分である。議題選定の経緯で述べた通り、学級としてどのように合唱コンクール当日を迎えたいかという思いが、提案理由のみならず生徒自身が定めた議題のサブテーマとして表れている。話し合いのめあては、どのようなかたちで個々が集団に貢献できるかを意識し、実践を見据えて発言することを踏まえて設定された。

授業記録キ	C: 生徒
司会者：今日の議題は「合唱コンクール一人一役プロジェクト ～みんなで団結し、協力し、楽しく合唱コンクールを迎えるために～」です。提案理由をC1さん、お願いします。 C1：9月に行われる合唱コンクールをクラス全員で力を尽くし、悔いのないものにしたいと思って提案しました。 司会者：今日の話し合いでは、「学級のために自分ができることを考える」や「みんなの意見をよく聞いて自分の意見を言う」ということをめあてとして話し合いを行ってください。 それでは話し合いを始めます。	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: 40px; margin: 5px auto;">提案理由</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: 40px; margin: 5px auto;">めあての確認</div>

話し合いの冒頭では、司会者が発言を求めても挙手する生徒が現れなかったため、2分程度、近くの生徒同士で相談する時間を設けた後、改めて司会が発言を求めた。すると多くの手が挙がり、「撮影係」、「盛り上げ係」、「計画係」など、11もの案が具体的な活動内容とともに提案された。授業記録クは、意見を比べる段階で「励まし係」について発言をしている場面である。C2は「励まし係」が係として適切ではないという内容の発言をしている。この発言を受けてC3も同意であることを示している。

授業記録ク	C: 生徒
C2：はい。励まし係っていいんですけど、落ち込んでいる人を励ますっていうのは自然にみんなができたほうがいいと思うので、あえて係にするのはちょっとな、と思いました。 記録者：反対？賛成？どっち？ C2：(励まし係に) 反対。 司会者：他に何かありますか？ C3：えっと、今のC3さんからの意見で、私も励ましっていいのは、一人一人がやったほうがいいと思うので、なくてもいいんじゃないかなって思うんですけど、あったほうがいいと思う人はいますか？	

話し合いの中では、授業記録クのように意見のつながりが多く見られた。このことから、意見を出すことに終始せず、めあてにそって十分な吟味の上で話し合いができたといえる。一方、一つの案に対して否定的な意見が続いてしまう場面が見られ、その意見のよさを取り入れたり、工夫によって解決したりしようとする建設的な発言が見られなかったことは課題として残った。とはいえ、賛成意見ばかりではなく、理由を添えた反対意見が出たことについて言えば、周囲からどのように思われているかを気にする年齢にありながらも、本音で話し合うことができたことの表れといえる。このような話し合いが実現したのは、生徒にとって関心の高い学校行事について議題化できたことに始まり、さらには提案理由の明確化によって、生徒が活動の目的意識を十分に共有していたことによるものと考えられる。結果として係としての妥当性や実践を意識しながら意欲的に話し合うことにつながった。

手立て2 話し合いの終末における価値付け

授業記録ケは、発言をした生徒ではなく、めあてに沿って自分の考えを事前のアンケートに書いた行為そのものが学級会への参加であることを価値付けた場面である。その上で、互いの思いを伝え合っこそ、納得のいく集団決定に結びつくことを助言し、次回以降の学級会に向けた課題を示した。

授業記録ケ	T：教師
T：（発言しようとしながらも）手がさがってしまった人もいたのですが、（事前の）アンケートをみなさん書いていましたよね？アンケートを書いている時点で一生懸命頑張ったなと思っています。	
—中 略—	
T：言おうかと思ったけどどうしようどうしよう、と思った人は次回ぜひ手を挙げて言ってみてください。（今日のように）賛成意見、反対意見があると、納得ができるでしょ？ただ決めるだけではなくて、いろいろな視点で意見が出ると納得ができるかなと思うので、次回からさらに発言が増えるといいと思います。合唱コンクールに向けても意気込みが出ていましたので、ぜひこのまま頑張ってほしいと思います。	

話し合いを振り返った生徒の感想の中に、「一人一人違う意見をもっていたけど、互いに納得して決まっていきたいへんよい話し合いでした。私も次は意見を出したいと思います。」という記述があった。この価値付けによって、発言をしなかった生徒にも、話し合いの質に着目させることができ、吟味・折り合いの実感や、集団決定の実感につなげること、そして、今後の実践意欲につなげることができると分かった。このことから、学級の実態に応じて、話し合いの経験が十分でないうちは、話し合いの参加姿勢について価値付けることから始めることも必要だと分かった。

手立て3 活動のつながりや成果を意識付けるためのワークシートの工夫

ア 話し合いのワークシートから

表7は、話し合いで決まったことに対してがんばりたいことの記述である。C4やC5の記述からは、自分たちで決めたという自治意識や話し合いの充実感を見取ることができたとともに、実践に向けた意欲を見取ることができた。C6やC7の記述から、話し合いで決まったことを受け、合唱練習の場面で自分がどのように集団にはたらきかけていくのかをイメージできていることが分かる。事前の意識調査では話し合いと実践との結びつきが弱い傾向にあった生徒が、ワークシートの工夫によって、活動のつながりを意識できるようになったといえる。

表7 話し合いで決まったことに対してがんばりたいことの記述（生徒のワークシートより抜粋）

C4	決まった係は自分たちで決めたから、責任をもってやる。
C5	時間をこんなにも使ってみんなで真剣に話し合って決まったので、合唱コンにも真剣に取り組みたい。
C6	はげまし係はなくなったけど、自分たちで自主的にしていきたい。
C7	盛り上げ係に入って、みんなの気持ちもよくなり、大きい声を出していこうと思っています。

イ 実践（係活動）の振り返りワークシートから

表8は、合唱コンクールに向けて実践した係活動について振り返った記述である。集団の一員として貢献できた自分を振り返ることができるように「自分自身の成長」と「学級集団としての成長」という二つの記入欄を設けた。C8の記述からは具体的な場面を振り返りながら、仲間と協力し、主体的に活動できたことへの実感を見取ることができた。ワークシートに『『団結し、協力し、楽しく合唱コンクールを迎える』という目標は達成できましたか。』という質問項目を設けたところ、どうしてもとりたかった最優秀賞がとれなかったことを理由に挙げた1名を除く36名が「はい（達成できた）」と回答した。振り返りの視点を今回のように焦点化したことで、賞を獲得できたかという点のみに着目することなく、目標の達成や活動の成果を十分に振り返ることができたと考えられる。

表8 係活動を振り返って（生徒のワークシートより抜粋）

	係活動をやってよかったこと	どういうときにそう感じたか	自分自身の成長は？	学級の成長は？
C8	私は計画係でその日のやることを分刻みで計画していたのでみんなが時計を見ながら動いていたのもったいない時間がなかった。	音楽室や体育館などで練習ができる日には声をかけ合って素早く移動することができていたから。	だんだん前日から次の日の練習内容を計画するようになったから余裕がもてた。声も積極的にかけられるようになった。	みんなで協力できるようになったし先生に言われなくても自分たちで動けるようになった。声もかけ合うことができていたと思う。

（4）中学校1年 第2回（市内C中学校：12月実施）

① 授業の概要

<p>【議題】『『2014 Playback 集会』でやることを決めよう』</p> <p>【議題選定の経緯と活動のねらい】</p> <p>本議題は冬季休業前の最終日に予定されている学級活動の時間をどのように過ごすかについて話し合うものである。夏季休業前に学級レクリエーションを行った経験から、今回も同じような内容でやりたいという声が出た。教師の意図として「既存のレクリエーションを楽しむ」集会からの発展性をもたせることや、1回目の検証授業のようにそれぞれが役割をもってつくる活動を学校行事以外の場面でも経験させたいと考え、そのための指導・援助を「手立て1」の中で行った。</p> <p>【学習指導要領との関連】</p> <p>学級活動（1）学級や学校の生活づくり ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決</p> <p>【活動の流れと検証の視点】</p> <p>検証授業1と同様。</p>
--

② 内容分析と手立ての検証

手立て1 提案理由の明確化と話し合いのめあての設定

授業記録コは、プログラム委員会での教師と生徒のやりとりを記録したものである。

<p>授業記録コ T：教師 C：生徒</p> <p>T：集会2回目だよな？7月の集会ってどんな目的でやったのか覚えている？</p> <p>C1：「絆を深める」。</p> <p>T：そうだったよね、7月の集会は「絆を深める」。今回の集会は？</p> <p>C1：より一層、「絆を深める」。</p> <p>T：7月と何が違うの？</p> <p>C2：思い出がこちらの方が多から…こちらっていうのは現在の方が多からその思い出の多さを…。</p> <p>T：何のために思い出を（振り返るの）？</p> <p>C1：7月の絆のレベルっていうのはこれくらい。12月はこれくらい。3月はこれくらい。</p> <p>T：…にしていけないとだめなんだよね？</p> <p>C3：7月よりみんなの絆が深まっていると思うし、一人一人のことももっと知っていると思うから…。</p> <p>T：じゃあ、この集会をすると何がどう変わるの？</p> <p>C3：学級目標にあと一歩、二歩近づくとする。</p> <p>C2：1年生が終わって2年生になっても、思い出が頭にしみついて、思い出して、うれしい思い出しか残らなくなるとする。</p>	<p>前回の集会との違いを問う</p> <p>集会を行う目的を問う</p>
--	---------------------------------------

授業記録コの下線部に見られるような投げ掛けを通して、生徒の思いを引き出すようにしたことにより、集会の目的が「これまでの学級のあゆみや知り合った仲間のことを振り返る集会にしたい」という明確なものとなり、生徒にとって必然性のある活動につながる事ができたと考えられる。生徒は、話合いのめあてを「一年を振り返ることのできるレクを考えよう」に設定し、生徒自身の手で事前にアイデアを集めるためのアンケートを作成したり、話合いのシミュレーションに臨んだりと意欲的に学級会へ向けた準備に取り組んだ。学級会当日は、二週間後に予定された学級集会で行うレクリエーションについて、「既存のレク」ではなく、「一年を振り返ることのできる工夫のあるレク」を決める話合いが展開された。授業記録サは、それまでに用意した案を合わせるアイデアを思いついたC5が、そのアイデアについて丁寧に説明しているところである。C5の提案に対し、C6のように「分かろうとする発言」やC7のように「相手を意識した発言」などが見られ、結論が出ずに停滞しかけていた話合いから一転して、全員の納得を得られる集団決定につながった。

授業記録サ	T : 教師	C : 生徒
C5 : えっと、賛成反対じゃないんですけどいいですか？あの、いつどこで誰がどうしたゲームを少し変えて…(中略)…「人当てゲーム」と「いつどこで誰がどうしたゲーム」を合体したらいいと思います。		
司会者 : 今の意見に対して賛成、反対、つけたしをお願いします。		
C6 : なんだか(C5さんの説明が)よくわからなかったの、もう一回お願いします。		
C5 : 例えば…とても簡単に言うと…(中略)…という風に出題すると、人当てゲームにもなるし、いつどこで誰が何をどうしたゲームにもなるのではと思いました。		
司会者 : 静かにしてください。では今の意見に賛成反対をお願いします。		
C7 : えっと今のC5さんの意見にすごく賛成しています。理由は2つの案をくっつけるっていうこともそうだし、「誰が」のところの人当てゲームがあてはまるっていうのもすごくいいと思ったからです。		

手立て2 話合いの終末における価値付け

授業記録シは、いくつかの案を合わせて、よりよい考えを生み出したC5の発言を教師が価値付けている場面である。これまでの学級会では、「賛成」あるいは「反対」の主張は多くの生徒がするようになったものの、建設的な意見が出ないことが多かった。1回目の検証授業以降の学級会では、否定的な雰囲気にならないよう、反対意見を述べた生徒に対して「それでは、あなたはどの意見に賛成ですか？」と投げ掛けることを教師が司会者に助言した。そうした司会者への指導も、よりよい集団決定につながる発言を生み出す上で効果を発揮したといえる。こうして、建設的な意見を考えられるようになった生徒の姿を見逃すことなく価値付けることにつながった。

授業記録シ	T : 教師
T : ○○さんの意見を受けていろんな意見を取り入れた工夫ができないかな、と考え、頑張って発言してくれたC5さん。きちんと例まで考えて発言していましたね。	

手立て3 活動のつながりや成果を意識付けるためのワークシートの工夫

実践に向けてがんばりたいことの記述では、「決まったレクのよさを生かして振り返りをしたい。」というめあてに沿った記述が多数を占めていたことから、めあてを意識することが生徒の中に定着しているといえる。表9は集会活動を振り返っての記述である。C8の記述からは学級への愛着とともに、みんなで決めてみんなで活動をつくっていくことの価値を実感し、「よりよい学級をつくるために話合いに積極的に参加したい」という意欲を見取ることができた。

表9 集会活動を振り返って(生徒のワークシートより抜粋)

C8	楽しむが目的じゃない集会でも、このクラスはやっぱり楽しくなっちゃうんだと思い、よかったなと思いました。私はみんなで決めてみんなで楽しむことの大切さを学びました。次の話合いはもっと積極的に参加して、もっといいクラスにしようと思います。
----	--

7 検証授業を実施した学級の変容

(1) A小学校3年生

① 児童の意識の変容

図4は、第1回検証授業の前(6月)と第2回検証授業の後(12月)に実施した意識調査から「学級会は好きですか」という質問への回答結果を取り出して比較したものである。もともと学級会への意識が高い学級だが、学級会が「好き」と答えた児童は18人から22人に増加した。また、自由記述の内容から、学級会に対する考え方に質的な変容が見られた(図5)。

児童A、Bについては、話し合うことそのものへの否定や理由のない肯定から、学級集団としてのまとまりを生む活動へと学級会のとらえ方が変容している。児童C、Dについては、意見の違いを乗り越えたり、解決方法につ

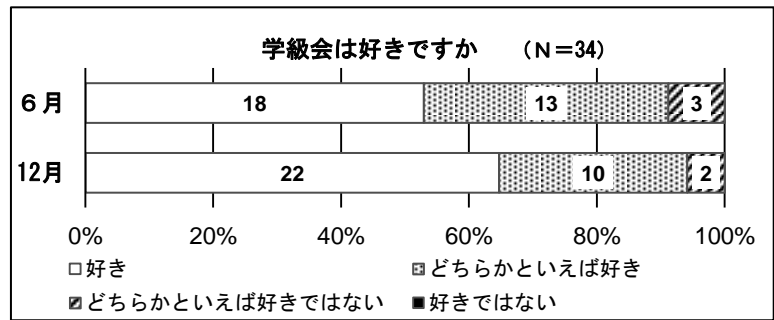


図4 A小学校3年生 研究対象学級の調査結果

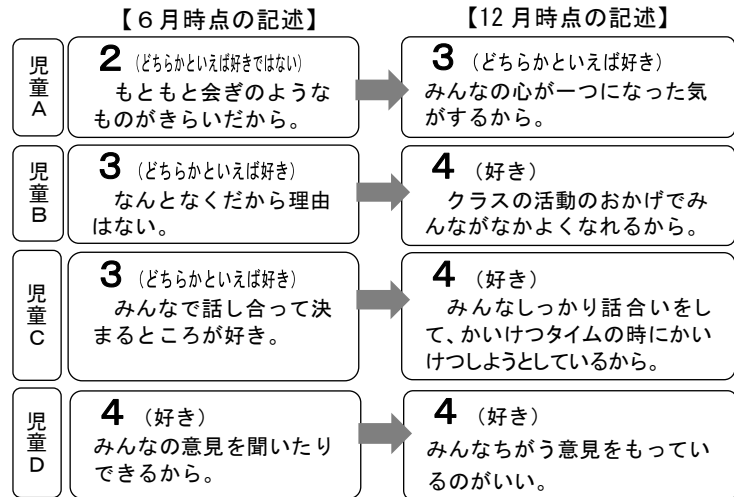


図5 A小学校3年生 意識調査における自由記述の抜粋

いて検討したりする経験を積み重ねたからこそその深まりのあるとらえ方へと変容している。その他の児童の記述に見られた特徴として「4年生になったらこのクラスは違ってしまいうし思い出になるから。」「学級でいろいろ決めてからやると楽しいし、思い出ができるから。」というように「思い出」という単語が随所に見られた。このことから、生活づくりを通して児童の中に学級独自の文化を一つ一つ積み上げているという実感も生まれているのではないかと考えられる。

② 授業者が感じた学級の変容

小学校における検証授業の授業者は、「よりよい生活づくりへの意欲の高まり」という視点から、2回の授業実践や日常生活の様子を振り返り、学級の変容を次のように述べている。

- i) 6月の検証授業以降は、児童は自分の意見だけを押し通さなくなり、周囲に対して「どうですか?」と投げ掛ける雰囲気が出た。学級会の場面でも他の人の意見に耳を傾ける場面が増えたと感じる。12月の検証授業の中でも「苦手だっという人はこのルールでいいですか?」と他者の意見を積極的に取り入れようとする場面が見られるようになった。
- ii) 12月の検証授業では、これまでの「楽しいからこの集会をやりたい。」ではなく、「係の企画に賛同できない部分があり、参加しない人がいる状況を変えたい。」という日常生活の中から出た問題点を議題化することができた。企画している児童の思い、参加しない児童の思いを互いに分かり合おうとする姿が見られた。集会活動後も外遊びに参加する児童が増え、提案者の児童も継続的に参加している。

上記の内容から次のことが読み取れる。

i) について、授業者は以前から「中学年の児童が他者の視点に立って物事を考えることの難しさ」を感じていた。検証授業を通して「苦手な人の気持ちに寄り添う」というめあてから「苦手な人も得意な人も楽しめる」めあてへと他者意識の広がりを意図しためあての設定をしたことで、児童の中に多様な他者の考えを取り入れようとする意識の育ちが見られるようになったと考えられる。

ii) については、集会の実践を目的とした学級会が多かった段階から、改善すべき事柄を解決する経験をしたことによって、集会活動後もその経験を生かして生活できていることの表れといえる。

(2) C中学校1年生

① 生徒の意識の変容

図6は、第1回検証授業の前(7月)と第2回検証授業の後(12月)に実施した意識調査から「学級会は好きですか」という質問への回答結果を取り出して比較したものである。「学級会が好き」と回答した生徒の人数は6人から11人に増加した。また、自由記述の内容から学級会に対する考え方に質的な変容が見られた(図7)。

生徒A～Eのどの記述からも、7月時点では見られなかった価値の実感を見取ることができる。生徒BやDの記述には、「納得」という表現が用いられていることから、個々の考えの違いを乗り越えられるようになったといえる。生徒Eは、もともと学級会に肯定的な生徒だが、学級がめざす姿に近づくための学級会であるという認識に変容していることが分かる。記述内容の全体的な傾向として、7月時点では「眠くなるから」、「勉強しなくていいから」

など「私」を主語にした記述が多く見られたが、12月時点では「みんな」を主語にした記述が増えた。学級全体でよりよい学級生活をめざしているという実感が、こうした変容を生んだものと考えられる。

② 授業者が感じた学級の変容

中学校における検証授業の授業者は、「よりよい生活づくりへの意欲の高まり」という視点から、2回の授業実践や日常生活の様子を振り返り、学級の変容を次のように述べている。

- i) 7月の検証授業以降、「『合唱のときのように』みんなで話し合って決めよう。」という生徒の声をたびたび聞くようになった。以前は、教師側から議題を提示したり、議題のヒントを与えたりすることが多かったが、後期に入り、生活態度に中だるみの様子が見られた頃、「みんなで後期の生活目標を決めたい。」という生徒が現れるなど、生徒の自発的な提案で学級会を開けるようになってきた。
- ii) 学級の集会活動(12月)に向けて自分たちで決めた係の分担をする際、「こっちの係は希望者が少ない。」「それなら、僕がそちらの係に移るよ。」という自然なやりとりがあった。楽しいことはみんなでつくっていこう、自分たちで決めたことはそれぞれが責任をもってみんなでやろうという意識が高まっていることの表れでもあり、学級集団としての成長を感じた。

上記の内容から次のことが読み取れる。

i) について、検証授業後に実施された生活目標についての学級会は、生徒自身が学級の生活態度に改善の必要性を感じたからこそ行われたものである。7月の検証授業を起点として「自分たちの生活に関わることはみんなで話し合って決める」という経験が、生徒の中に確かなものとなっていることの表れといえる。また、「みんなで話し合って解決していく」ことの価値を実感し、自分たちの生活を省みる場という視点で学級活動をとらえられるようになってきているともいえる。

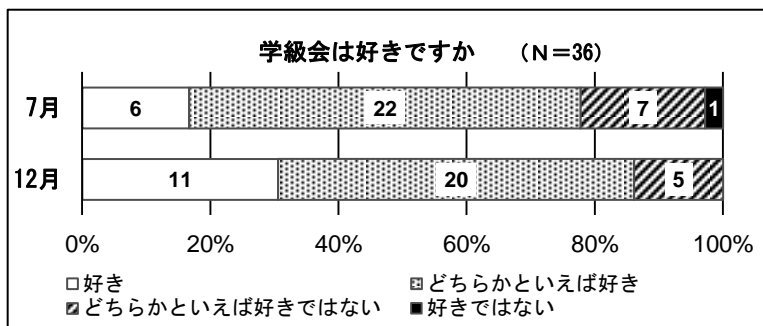


図6 C中学校1年生 研究対象学級の調査結果

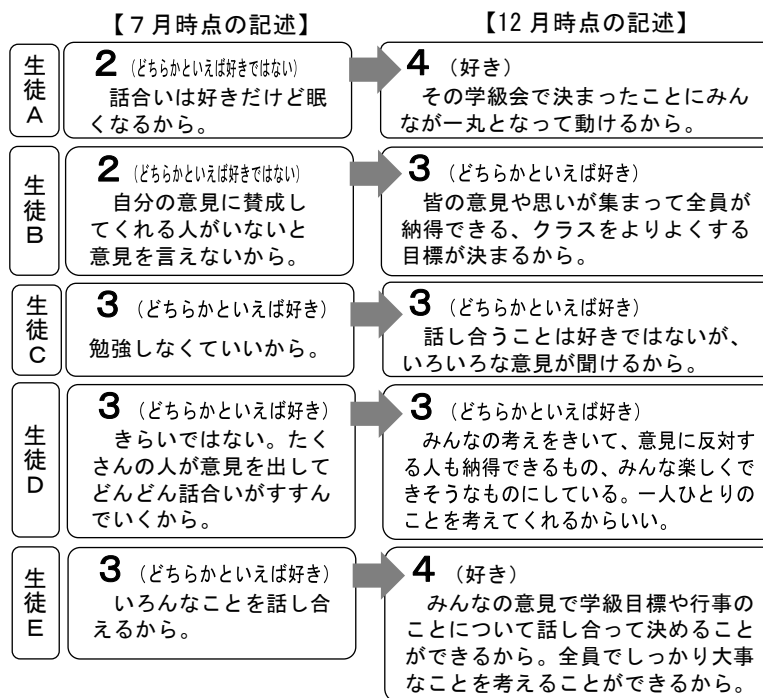


図7 C中学校1年生 意識調査における自由記述の抜粋

iiについては、日頃の人間関係に囚われずに、また、学級会の場に限定されることなく、学級のためにはこうした方がよいと思うことを自然と提案できるようになったことの表れであるといえる。

このように、意識調査および授業者の見取りから、小学校と中学校のいずれの実践においても学級活動に対する意識に前向きな変容が見られた。また、学級活動および日常生活の場面でよりよい生活を実現しようとする生徒の姿も見られるようになった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究を通して見えてきたこと

(1) 活動の価値を子どもたちの実感につなげる手立てを通して

授業実践において共通して講じた三つの手立てについて以下に示す。

手立て1 提案理由の明確化と話し合いのめあての設定

手立て1によって、子どもたちが何のために話し合うのかという目的意識をもつことにつながった。その結果、提案理由やめあてを理解した上で自分なりの考えをもつとともに、めあて（学級としてめざそうとする姿）から逸れずに話し合う姿が見られ、意欲的に話し合いに臨めるようになった。このことから、手立て1は授業構想における「目的意識の共有」や「吟味・折り合いの実感」において特に有効な手立てであると分かった。

手立て2 話し合いの終末における価値付け

手立て2によって、子どもたちが集団決定に必要な考え方を理解したり、集団決定に貢献できた自分を自覚したりすることにつながった。その結果、学級会ではP. 63に示した発言の種類の中でも「相手を意識した発言」や「集団決定に向かおうとする発言」が話し合いの回数を重ねるごとに多く見られるようになった。また、話し合いの振り返りや事後の意識調査において「集団にとって納得のいく決定ができる（できた）」という主旨の記述が増えた。このことから、手立て2は授業構想における「集団決定の実感」において特に有効な手立てであると分かった。

手立て3 活動のつながりや成果を意識付けるワークシートの工夫

話し合いと実践のつながりを意識付けるための質問と記述欄をワークシートに設けた。これにより、子どもたちが集団決定の内容を踏まえて実践に向けた自己決定をすることにつながった。また、活動の成果を意識付けるために「やってよかったこと」と「その理由」を区別した質問と記述欄を設けた。これにより、子どもたちが「協力できた」や「めあてを達成できた」と思うに至った具体的な友達の姿や関わりの場面を根拠としながら、学級のよりよい変化に気付くことにつながった。このことから、手立て3は授業構想における「実現の実感」や「成長の実感」において特に有効な手立てであることが分かった。めあてや学級目標に立ち返って実践を見通したり振り返ったりすることが定着したことについては、手立て1や手立て2を踏まえてこそその成果といえる。

以上の理由から、これら三つの手立ては、活動の価値を子どもたちの実感につなげる手立てとして有効であることが明らかとなった。加えて強調したいのは、三つの手立てを画一的に行っただけでは上記のような効果は得られないということである。小学校の事例のような「他者意識が十分でないという発達段階を意識した」めあての設定や、中学校の事例のような「これまでの話し合い活動の経験を意識した」価値付けなど、教師が学級の実態を考慮し、集団の成長への見通しをもちながら手立てを講じていくことで、三つの手立てはより効果を発揮するといえる。

(2) 話し合いと実践を一連の活動としてとらえ、積み重ねることを通して

本研究では、事前の意識調査から事後の意識調査までのおよそ6ヶ月間に、検証授業を含め各学級

が5回前後の学級会および実践を行った。期間にして年度の半分ほどだが、それだけでも事後の意識調査において学級会を肯定的にとらえる子どもの増加や学級会に対する意識の変容が見られた。このことから、前述の三つの手立ての効果に加え、話し合いと実践という一連の活動を積み重ねることによって、活動の価値の実感が子どもたちの中で確かなものとなり、「みんなでよりよい生活をつくっているのだ」という自信と、次の活動への意欲につながっていくということが分かった。

2 今後の課題

- ・事後の意識調査では、「みんなで話し合うことは大切だが、やはり発言は苦手である。」という記述が見られた。このことから、たとえ発言しなくても、思いや願いをもって参加する態度や他者の思いを受け止めようとする態度など、多様な姿を認める教師の姿勢が必要と考える。教師の肯定的な評価の継続が、安心して自分の考えを表出できる学級風土の醸成にもつながるであろう。
- ・本研究で重視した手立ての中でも特に「提案理由の明確化やめあての設定」においては、事前の準備活動が重要な意味をもつので、計画委員会を実施するための時間確保も大きな課題である。小学校では中休みや昼休みの時間が活用されているが、中学校では中休みに当てはまる時間がない。そのため、学年や学校全体の共通理解のもとに、朝学活の時間を活用することや、特定の曜日の放課後30分程度を「学級活動優先の時間」に設定することなどを検討する必要がある。
- ・学級活動（1）が教師の適切な指導のもとに展開されるべき活動であることはこれまでもいわれてきた。しかし、教師の望む結論に導くためだけに活動を整えるという考え方では、子どもたちの「よりよくありたい」という思いや願いを生かした活動にはなり得ない。自治的・自発的な実践活動という学級活動（1）の特質について教師が十分に理解し、「自分たちで決めることができた。」「決めたことを協力して実践したら、確かに何かをよい方向に変えることができた。」という子どもたちの実感を大切にできる指導観をもって、さらなる指導や援助の在り方を追究していきたい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生をはじめ学校教職員の皆様に、心より感謝し厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- | | | | |
|--------------------------|-------------------------------|--------|-------|
| 新富 康央 | 『小学校新学習指導要領の展開 特別活動編』 | 明治図書 | 2008年 |
| 天笠 茂 | 『中学校新学習指導要領の展開 特別活動編』 | 明治図書 | 2008年 |
| 門脇 厚司 | 『社会力を育てる ー新しい「学び」の構想』 | 岩波書店 | 2010年 |
| 赤坂 真二 | 『先生のためのアドラー心理学 勇気付けの学級づくり』 | ほんの森出版 | 2010年 |
| 山口 満／安井 一郎 | 『改訂新版 特別活動と人間形成』 | 学文社 | 2010年 |
| 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程センター | 『楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』 | 文溪堂 | 2014年 |

【指導助言者】

- | | |
|---------------------------------|-------|
| 十文字学園女子大学講師 | 上原 行義 |
| 川崎市立小学校特別活動研究会長（川崎市立向小学校長） | 高山 幸治 |
| 川崎市立中学校教育研究会特別活動部会長（川崎市立稲田中学校長） | 大内 孝二 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 小堤 紀子 |